

## シンポジウム「写真経験の社会史」参加記

今は昔、まだ学部生として建築史研究室に配属されたばかりのころ、僕は指導教官の博士論文に使う写真の現像という大役を任されたことがある。もちろん、一枚一枚親身の手作業である。指定されたフィルムを、6センチ幅か9センチ幅で2枚ずつ焼いていくわけだが、先生の多年にわたるご研究の成果なのだから、その量は膨大なものとなった。追加やら試し焼きやらリテイクも合わせればその数は軽く四ケタに届くわけで、先輩諸氏が二の足を踏んだために新米の僕にお鉢が回ってきたという事情は否定できない。何しろこちらは古式ゆかしいロクロ判フィルムはおろか、現像液さえも初めて見るド素人なのだ。依頼するご本人も、あからさまに不安そうな顔をしていた。

そんな顔をしたって、もう後の祭りである。

何はともあれ、実践あるのみ。古びたフィルムを現像台におき、ピントを合わせて、露光時間をあれこれ試してみる。でも現像してみれば真っ黒か真っ白。おかしいなあ。そもそも、フィルム自身よりも小さな写真なんて、いったいどう焼けばいいのやら…。

当然ながら何度も徹夜するはめになったし、指導教官も何しろ自分の博士論文の要なのだから、簡単には容赦してくれない。出来が気に入らないと何度もやり直しとなった。ただ、不思議と辛いとはあまり感じなかった。それは作業自体が面白かったからだ。

くたびれた現像液の中から、今はもう存在しない、過去の建物が浮かび上がってくる瞬間が特に好きだった。暖房の切れた真夜中の暗室で、薬品の匂いに囲まれながら、無数の過去を再生していくプロセスには、確かに錬金術めいた全能感があった。小さなフィルムの片隅に映る、通りすがりの人を見るのも好きだった。——この人は今、何歳でどこに住んでいるのだろうか。実際の写真では、彼らはトリミングで消えてしまうのだが、でも本人も全く知らない所で、こうして小さな小さな歴史となっているわけだ…。

今では「写真の現像ができる」というのは、僕の密かな自慢の一つだ。デジカメしか触ったことない人は不幸だとさえ僕は思う。それではおそらく「写真とは何か」を永遠に理解できないままだろうから。

もちろん、現像ができるからといって僕に写真が分かるわけでもないのだが。

すっかり話の枕が長くなってしまったが、それが研究者としての原体験である以上、僕は写真史というジャンルに深い関心を抱かずにはいられない。というわけで、大阪市立大学で開催された[シンポジウム「写真経験の社会史」](#)に勇んで参加してみたのである。時は西暦2010年3月27日、すなわち年度末もどんづまりである。出発の前日に事務室で「絶対にスケジュール通りに帰ってきて下さいよ」と念を押されるほどの、まさに逢魔が時。いや、もちろん寄り道する気はありません。

ほら、ちゃんと帰ってきたじゃないですか。

とまれ、僕の専攻である建築史も、写真史と同様に非文字資料として歴史学では傍流におかれるものの一つだ。同病相憐れむというと語弊があるだろうが、従来の歴史学から、補助科学として「足軽」扱いを受けてきた（受けている）経緯はどちらも変わらない。だが文書にしか語れない歴史があるのと同様に、写真や建築でしか語りえぬ過去もまたある。多年にわたり、実証性の名の下に後者を否定し続けた固陋な歴史学に対して、すわ反攻の狼煙を上げるべきである。



もちろんシンポジウムの仕掛け人である緒川直人氏は、僕ほどお気楽でも軽率でもないから、彼は趣意説明の壇上で「写真経験の諸相を手がかりに」「写真史のナラティブの拡幅をめざす」とともに、「写真資料論の輪郭の展望」と「写真研究の構図を問い直すこと」が目的だと述べられた。写真を建築に置きかえれば、それはそのまま建築史にも通用する話だ。それだけに、緒川氏がこの趣意説明にこめた思いは、僕も大きく共感できるのである。

さて諸兄のご賢察通り、一口に写真史といっても、そこには大きく二つの意味がある。一つは文字通りの「写真の歴史」であり、もう一つは「写真に基づいて記述される歴史」である。午前のセッションは、おそらくは意図的に、その断層を色濃く反映したものとなった。

戸田昌子氏の報告は、前者の性格が最も強いものであった。「近代写真」という語で曖昧に一括りにされてきた 1970 年代までの写真界の中で、絵画性を重視した作品や、機械性・機能性を至上とする作品が混淆していた状況を概括し、この概念が作家性に乏しい膨大な写真群をスポイルしてきた排他的言説への批判を交えつつ、従来における写真史の近代的視座の修正をめざした報告であった。個人的に興味深かった点は、いわゆるモダニズムが滲透していく時期において、建築と写真にはひとかたならぬ類似点が垣間見えるということであった。確かに建築も写真も、技術でも芸術でもあるという両義性をもった世界であるわけだから、当然なのかもしれないが、「アート・アンド・テクノロジーとモダニズム」というもっと広い枠組みでより大きな展望を期待できる論点かもしれない。

続く有馬学氏と緒川直人氏の報告は対照的に、写真を出発点として新たな歴史記述をはじめようとするものであった。有馬報告は、家族アルバムで地域史を編纂したというご自身の経験をふまえて、史料としてのイメージの可能性を論じたものであった。挙げられた個々の写真も大変に興味深いものではあったが、言わずとした近代史の重鎮でありながら、今も斬新な手法を積極的に開拓していこうという姿勢には深く敬服の念を覚えた。「はじめに史料ありき」という立脚点や、この史料を使うために「入れ物」としての方法を考えようというその発想は、「はじめに方法論ありき」で論を進めがちな、方法論に合うデータだけを偏愛する人々とはまさに一線を画するものであると痛感した。有馬氏はアルバムがカラーになると家族写真がつまらなくなるという。さもありません。今の携帯画像や子供の運動会のムービーなんかはもっとつまらないかもしれない。でも、その理由を追及するのは難しそうだ。

続く緒川報告は、自由民権運動における民権家壮士のイメージ戦略を論じたもので、日清戦争以前には政治写真は成立していなかったという従来の言説を真っ向から否定した、刺激的で野心的なものであった。バンカラ風の衣装に自由頭という民権家壮士の外観が、帝国議会開設を機に紳士風代議士のそれに一変することや、板垣退助などの花形民権家の肖像写真が写真舗の投機的な営業戦略の中でスターシステムをつくりあげていくプロセスなど興味深い事例が報告された。もしもそれが個々の事例に終始するものではなく、自由民権運動全般に通底する広く一般的な現象であったと論証できるならば、これは明治前期の政治史や社会史に大きな修正を迫るものとなるだろう。

午後のセッションは、民俗学と写真資料のありかたを論じる二つの報告ではじまった。矢野敬一先生の報告は、熊谷元一という写真家を軸として、戦後の写真界・出版界・人文社会科学がリソースとしての写真とどのようにして向き合ってきたかを語るものであった。1950 年代後半には 400 万人から 500 万人と言われるアマチュア写真家の分厚い層があり、これを巻き込んで流通させていこうとする傾向が、写真雑誌や写真文庫として存在したことや、写真を強く意識した全集・図録の出版が民俗学や社会史に見られたことを指摘し、さりながらこれらの写真を系統的に蒐集・活用とする動きはなかったことや、その後は出版ルートが衰退し、アマチュア写真家全体のエネルギーが衰えてしまうまでの時代的変遷を社会史的な側面からの反省点として論じたものであった。精神性を重視した民俗学がことばを重んじた反面、写真を史料ではなく啓蒙の具としてきた戦後歴史学という構図には、確かに現況の歴史学が抱える問題と響きあうものがあるように思える。まったく個人的な感想だが、矢野先生のような美声が僕には心底うらやましい。

続く報告者は「柳田国男と写真」と題した佐藤健二氏であった。早速、穏やかな口調で切り出したのは「私は矢野先生とはすこしお考えが違う部分があるのですが...」という一語である。それは、「柳田は写真を重視してはいなかった」という矢野報告への反論であった。佐藤報告によれば、矢野先生が論拠とされた『日本民族図録』の一文は、お弟子さんの手によるものではないかという。柳田は朝日新聞社が蓄積しつつあった映像アーカイブとの邂逅により、写真の有効性をそれなりに意識していたが、従来の調査映像では葬送や婚姻など生活の局面にあわせた写真経験に乏しかったために、自らの目指すような写真利用は難しかったのではないか、ということだ。報告の中心は、柳田が自身の業績の中でどのような形で写真を利用してきたの

かをまとめたものであったが、個人的には柳田国男が審査員として参加した『アサヒグラフ』誌による美人コンテストの一件が非常に興味深いので、是非是非この顛末を後日明らかにされることを願う次第である。

さて、最後の報告者である後藤真氏の報告は、情報歴史学の立場からデジタル・アーカイブとしての写真資料の現況と展望をテーマとして、大阪市立大学に寄贈された写真コレクションのデータベースを構築する際の理念と方向性を論じるとともに、メタデータの重要性とプラットフォームの共有化、研究活動における蓄積・解析を分離する必要性をふまえて、保存と共有にすぐれた新しい学知への道のりを展望するものであった。弊センターのように、膨大なリソースを有しながらそれをうまく発信できていない研究機関にとって、後藤報告が指摘する資料論的問題点は、まさにこれから肝に銘じなくてはいけない課題である。また、後藤氏には懇親会の席上でも色々と貴重な示唆をいただいた。特に「デジタル・データの寿命は長くても十年」という達観は、いたずらに永続性や普遍性を求めていた自分の迷妄をあっさりと払拭してくれるものであった。

これらの報告を受けて最後に今西一氏によるコメントがあった。写真史が自身の専攻ではないにもかかわらず、これだけ多岐にわたる報告内容に的確なコメントを加える「豪腕」ぶりは、ご本人が「話芸」と謙遜する以上に、豊かな学識に裏打ちされていなければできないことである。日本における歴史学の趨勢を熟知する今西氏からは、なぜ従来の歴史学が史料としての写真を軽視してきたのかが語られた。また、近代日本史と写真史が多年において基本的には没交渉であり、これまでの研究成果の発表媒体も異なっているため、それらを検討し直す必要性も複数の検討者から指摘された。

最後の質疑応答は佐藤氏の3点の見事な総括で締められた。□研究史・学史の限界を乗り越えるための基本的概念の再検討が必要である。□写真が作り上げる場をどのように対象化していくのか。場の対象化の難しさをどうするか。□写真経験を政治史や社会史へと包含するためには、「もの」としての存在形態からはじめることが重要である。また、データベース構築に際しては、学問の本質として、試行錯誤の過程も間違いを指摘できる共有性として重要であり、個性と付き合いながら共有性を指向する態度が知的交流の場としての将来性をはぐくむであろう。

今回のシンポジウムは、報告者の人選やその内容も含め、非常に質の高い、刺激的な内容であったと思う。だが、300人はゆうに入る大ホールにもかかわらず、参加者が40名弱という現実が、写真に対する歴史学の本質的な無関心を何よりも象徴するものであろう。年度末という時期の問題も、主催者側も認める広報宣伝の遅れもあろうが、要するに、日本の歴史研究者にとって、写真資料とはその程度の意味しか持たないのだ。今もなお、文字と数字だけで歴史をつくらうとしている人たちが圧倒的な多数を占める歴史学界。その体質が本質的に変わらない限り、あのホールが満員になる日は来ないだろう。

悲しいことに、それが世の現実なのだ。

それでも、少しずつ事態は変わっていくはずだ。僕らのサハリン・樺太研究もそうだった。

これも今は昔、僕が学生だったころ、樺太の研究を始めようとした同期の別学部の学生が、それはやめた方がいいと全力で阻止されていたのを思い出す。樺太なんて研究してもしょうがない——一昔前はそれが常識だったのだ。研究者など誰もいなかった。しかし今では志を同じくする人も増え、隔月の研究会に小さな部屋を埋めるほどの人が集うようになっている。（今回のシンポジウムと人数的には変わらない）もちろん、サハリン・樺太研究も前途多難である。けれど、それは写真史も同じである。だから、懇親会の席上で冗談のように取りざたされた「日本写真史学会」の旗揚げを、僕は大いに期待している。月並みながら「千里の道も一歩から」である。今回のシンポジウムはたぶん最初の一步だったはずだ。

そういう場に立ち会えたことは、たぶん幸せなことである。そう、遠い将来、あのシンポジウムに参加していたことを偉そうに自慢できる日を、僕は密かに楽しみにしているのだ。

(2010年3月30日 井潤裕、GCOE「境界研究の拠点形成」研究員)

「写真資料論」の可能性

# 写真経験の社会史

日時: 3月27日(土)  
10:00~18:00

場所: 大阪市立大学学術情報総合センター10F  
大ホール

題名: 「写真経験の社会史—「写真資料論」の可能性—」

——日本写真史研究の構図を描きなおす——

社会学・歴史学・史料学・民俗学・日本写真史それぞれの立場から、  
従来の日本写真史研究が積み残してきた様々な「写真経験」の諸相を洗いだす。  
そこから「写真経験の社会史」の新たな地平と、「写真資料論」の可能性を展望したい。

登壇者

1. 有馬 学
2. 今西 一
3. 佐藤健二
4. 戸田昌子
5. 矢野敬一
6. 緒川直人
7. 後藤 真

九州大学名誉教授  
小樽商科大学  
東京大学  
武蔵野美術大学  
静岡大学  
大阪市立大学都市研究プラザ(東海大学医療技術短期大学)  
大阪市立大学都市研究プラザ(花園大学)

コーディネーター: 添野 勉 (国立民族学博物館)

水谷 清佳 (東京成徳大学)

シンポジウムプロデューサー: 緒川 直人  
後藤 真



## ■ 略歴

### 有馬 学

九州大学大学院比較社会文化研究科名誉教授。  
日本近現代史。「帝国の昭和」(2002)、  
「日向写真帖家族の数だけ歴史がある」  
(共著:2002)。

### 今西 一

小樽商科大学商学部教授。日本近現代史。  
「国民国家とマイノリティ」(2000)、  
「遊女の社会史」(2007)など。

### 佐藤 健二

東京大学大学院人文社会系研究科教授。  
歴史社会学・社会調査史。「歴史社会学の作法」  
(2001)、「調査史のリテラシー」(近刊)など。

### 戸田 昌子

武蔵野美術大学非常勤講師。日本写真史。  
「写真史における「近代」と写真100年」(2001)、  
「誰の目で見えるのか:プレス・カメラマンの  
葛藤と作家性」(2009)など。

### 矢野 敬一

静岡大学教育学部准教授。日本民俗学。  
「写真家熊谷元一とメディアの時代」(2005)、  
「「家庭の味」の戦後民俗誌—主婦と団欒の時代」  
など。

### 緒川 直人

大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。  
東海大学医療技術短期大学講師。  
日本社会史・写真資料論。「アマチュア写真家  
野々村藤助と明治30年代写真史の再検討」(2007)  
「戦前期写真史科学の誕生—上田貞治郎日本全国  
名所写真帖コレクションの方法史的考察—」(近刊)

### 後藤 真

大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。  
花園大学専任講師。情報歴史学・デジタルアーカイブ  
論。「デジタル化による写真の史料学的研究の方法  
論的進展—上田貞治郎写真コレクションのデータ  
ベース化を通じて—」(2008)、「情報歴史学入門」  
(2009)など。

## ● プログラム

9:30 開 場

10:00 開会挨拶

10:10 趣旨説明

10:30 午前の部

戸田昌子・有馬 学・後藤 真

休憩 12:30～13:30

13:30 午後の部

矢野敬一・佐藤健二・緒川直人

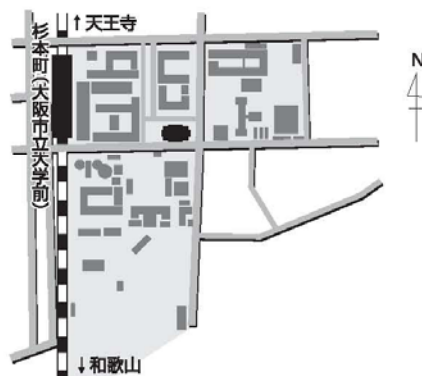
休憩 15:40～16:00

16:00 コメント

今西 一

16:40 パネル討論

17:55 閉会挨拶



- (1) JR阪和線「杉本町(大阪市立大学前)駅」下車、東へ徒歩約5分
- (2) 大阪市営地下鉄御堂筋線「あびこ駅」下車、  
4号出口より南西へ徒歩約20分

